

人間的労働の経済学的考察（七）

山 本 二 三 丸

は し が き

一 人間的労働の基本的意味……………（以上、第十四卷第四号所載）

二 本来的私的所有のもとの人間的労働

(1) 本来的私的所有の意味

(2) 社会的富の規定

（一）

（二）……………（以上、第十五卷第三号所載）

（三）……………（以上、第十五卷第四号所載）

(3) 商品生産における労働の二面性……………（以上、第十六卷第一号所載）

(4) 私的労働の社会的性格……………（以上、第十六卷第二号所載）

(5) 労働の対象化……………（以上、第十六卷第三号所載）

(6) 価値法則

（一）……………（以上、本号所載）

（二）……………（以下、次号所載予定）

人間的労働の経済学的考察（七）

人間の労働の経済学的考察(七)

三八

(三)

(7) 所有法則(交換の法則)

(8) 価値の自立化

(9) 發展法則

(10) 商品生産のもとでの人間の労働のあり方

三 人間の労働力の商品化

四 資本制的私的所有のもとでの人間の労働

五 社会的所有のもとでの人間の労働

六 総括

(おことわり)

『人間の労働の経済学的考察』と題されたこの拙論の(一)が発表されたのは、実にいまから十四年前の昭和三十六年(一九六一年)三月発行の本誌第十四巻第四号の誌上においてであった。しかし、これにつづく第十五巻第一号では、「賃銀論についての根本的問題点を明確にする必要に迫られ」て、急遽、『賃銀論はいかにあるべきか?——修正主義的諸偏向の克服のために』と題された論文の「前篇」を発表することになり、つづく第十五巻第二号にはその「後篇」が載せられることになった。そのため、やむなく、『人間の労働の経済学的考察』の(二)は、そのあとの第十五巻第三号(昭和三十六年十二月)にまわされることになり、以下の(三)、(四)、(五)および(六)は、目次にみられるように、連続して順調に発表された(その(六)を載せた第十六巻第三号は昭和三十七年十一月に刊行)。ところが、一九六〇年ごろを境としていちだんとはげしくなった修正主義的潮流の世界的猖獗ととりわけわが国でのその

主流の簇生・横行は、なお相当期間連載を必要とする本論稿の継続をしばらくさしひかえても、修正主義批判という緊急の課題をとりあげることが当面必要でもありまた適切でもあるのではないかという考え方にわたしを導いた。さまざまな形と色合いをもった修正主義諸理論を批判しその反科学的・反革命的品格を徹底的に究明するということは、けっして簡単・容易なものではなく、非力のわたしのつたない努力では十分な成果をあげることとはうていおぼつかないものであった。そのために——本誌に掲載される論稿の一回分の紙数が制限されているという事情も手伝って——論究の一応の結果を発表しおえるまでに、実に十二年の歳月を要することになった。本論稿の継続が大幅におくれたことの釈明のために、この間に発表された修正主義批判の拙論についてまったく知っていらない読者への紹介をかねて、つぎにそれらの論文の題名と発行年月とを記しておきたいとおもう。

一 論文『いわゆる「構造改革論」の理論的品格』。これは、本誌第十六卷第四号（昭和三十八年二月）から第九卷第二号（昭和四十年九月）まで、九回にわたって連載された（なお、本論文は、全体をまとめて、著書『構造改革論批判』として、昭和四十一年四月に刊行された）。

二 論文『正しい批判はいかにあるべきか——教条主義批判を装った修正主義』。これは、本誌第二十一卷第一号（昭和四十二年五月）の（一）から第二十四卷第一号（昭和四十五年五月）の（完）まで、十二篇をもって完結した。

三 論文『経済学における形態規定とはにか——いわゆる「宇野理論」の性格規定』。これは、本誌第二十四卷第二号（昭和四十五年八月）と同じく第三号とに、二回にわたって載せられた。

四 論文『経済と政治との関連の問題——いわゆる「トロツキズム」の性格規定』。これは、本誌第二十四卷第四号（昭和四十六年一月）の（一）から第二十八卷第二号（昭和四十九年七月）の（完）まで、十五篇をもって完結した。

五 論文『大きな実用主義とちっぽけな真理』これは、本誌第二十八卷第三・四合併号(昭和四十九年十二月)に載せられた。

本論稿は、目次にかかげられた項目を一読していただければすぐわかるように、もともと、主題についてその重要な諸側面をできるだけ正確に、しかもそれらの相互関連をあきらかにして全体的な把握を可能にするように、詳細に論究し、さらにそれらが歴史的發展にもなつて法則的にどのように変化・発展してきたか、また将来発展を上げるべきかということを経系的に明らかにしようとしたものである。だが、本論稿は、これまでのところ、すでに読者の承知していられるところでもあるが、それぞれの項目についての積極的な論究とあわせて、それらについての典型的な謬論として宇野弘藏氏の所説をとりあげ、その論理的性格——理論的性格ではない——を仔細に究明することに一半の力を注いできた。理論を正しく学びとり、これを発展させるには、第一に論理的思考が基本的な要件として要求されるのであるが、宇野氏の所説は、そのどれをとってみても論理的思考の欠如と俗物的推論のごたごたを示しており、甚しい場合には本人自身にもまともに説明できないような錯乱の文字と錯乱の文章が連続してあらわれるという有様である。宇野氏は、マルクスに学び、マルクス理論を正確に理解し、したがって、マルクス理論の根本的欠陥もことごとく見通すことができ、この欠陥をよく克服して真の科学的理論としてのマルクス経済学をうちたてるのがマルクス経済学を学ぶ者の第一の責務であつて、この責務を首尾よく果しえたのは乃公ひとりであり、その成果が氏自身のさまざまな論著に、とりわけ、氏の名著『経済原論』のなかに展開されているのだ、ということであらゆる機会に宣伝これつとめているようである。ところが、本人にもわからないような、錯乱の文字と錯乱の文章は、一見マルクスの文章に酷似しているという仮象のおかげで、かえって俗物的思考にとらわれた

者には、「神秘的」なものに見え、とりわけ世俗的權威の前にはもろくも拝跪する性癖の濃厚な小ブル的インテリ層のあいだでは、マルクスの主著『資本論』全三巻三、〇〇〇ページを刻苦して読むことよりも、宇野氏の主著『経済原則』全一冊二二七ページを一読することの方がはるかに「経済的」であるという、宇野氏の得意とする「経済原則」を忠実に遵守して、手つとりばやくマルクス経済学を卒業してしまい、あとは例によって例のごとき錯乱の文字をつらねて「權威」のお裾分けにあずかろうという、「経済的」関心がきわめて強烈であるようである。そして、このために、わが国の経済理論の分野では、マルクス理論を完全に歪めた反マルクス主義的な錯乱的文章を製造することに専従している論者が、なんと「真正の」マルクス経済学者としてまかりとおるということになっているが、こうしたわが国ならではの珍現象の本質を見究めるためにも、これらのえせマルクス経済学者の「教祖」ともいうべき宇野氏の「原典」について、そこに見出される「神秘的」文章の数々の論理的、性格を正確にとらえておく必要がある。このような吟味は、当然に本来の「原典」であるマルクスの『資本論』の中の理論的、諸命題について、その意味内容を十分な広がりと深さにおいて的確に把握することを要請するのであって、結局、宇野氏の「原典」の批判的検討は、マルクス『資本論』の真に科学的な精髓の正確な理解の達成ということに帰着せざるをえない。このような意味をふくめて、またそのために、この拙論のなかで一半の力はいわゆる「宇野理論」なるものたちといった吟味にさかれているといつてよい。

これまでのところで、「宇野理論」の論理的、性格も、そのマルクス改ざんの本質も、相当程度に明白になったものと考えてよいが、しかし、氏による改ざんと歪曲は、マルクス経済理論の「隅々まで」念入りにかつ徹底しておこなわれているので、われわれも、その改ざんと歪曲とを鮮明にすると同時に、マルクス経済理論の精髓をできる

だけ精確に把握するために、関連する項目にかんするかぎり、氏のものした文章をとりあげ、その本質究明を「隅々まで」念入りにかつ徹底しておこなうことが要請される。とはいえ、紙数の制限もあるので、こうした究明を持続するとしても、やはり適宜簡単化せざるをえないとおもわれる。

ところで、これからも相当期間おつきあいをよぎなくされる宇野氏の「理論的」文章について、読者の理解をふかめておく便宜も考えて、つぎの大切な事実をお伝えしておこう。それは、宇野氏がさかんにそれをつかつて例の文章をつくりあげているところの基本的な言葉、つまり、マルクスのうちだした基本的な概念について、氏がその意味内容の説明を全然していないということである。マルクスは、だれでも知っているように、経済理論体系においてその端初から出てくる基本的な概念について、正確で十分な説明をかならず与えている。なぜか？ これまでの古いブルジョアの学問でつかわれていた基本的概念は、その意味内容そのものが正しくなく、非科学的なものであって、真に科学的な理論体系をあらたにきざぎあげるには、これらの基本的概念の意味内容をすっかり改めなければならぬからであり、また、このように真に科学的な意味内容をあたえられた概念によって科学がうちたてられなければならないからである。そしてまた、基本的概念を体系的に叙述していくためには、当然、その発展関係が正しく説明されなければならない、そのためには、なによりもまず、先行する基本的概念の意味内容の十分な解明と展開が要請されるからである。どんな科学においても、その中で用いられている基本的な概念は、その理論体系のあり方とその内容とによって、その意味するところは精確に規定されている。それでなければ、科学は成り立たないのだ。ところで宇野氏は、マルクスの経済理論体系にけちをつけ、これを超克すると称するいわゆる「原理論」なるものをひろめている。したがって、この「原理論」に出てくる基本的概念の意味内容は、マルクスのそれ

とはちがつているものでなければならぬし、そのことを宇野氏自身は読者によくわかるように説明することが必要である。この、新しい意味内容の説明は、前人を超克してより高い科学をうちたてたと自称する「学者」にとつては、最低の、第一の義務である。ところが、宇野氏は、この当然の義務をまったく履行していないばかりか、これが科学者としての初歩的義務だということに感づくことすらできない有様である。わたしは、宇野氏のこのような科学者としての完全無欠な「欠格」を実証するひとつの実例として、「形態」および「形態規定」という基本的な概念についての、宇野氏の完全に錯乱した文章とでたらめな主張とをあげて、これを的確に論証したのであって、それが、さきにあげた、論文『経済学における形態規定とはなにか——いわゆる「宇野理論」の性格規定』である。宇野氏は、周知のように、いたるところで「商品、貨幣、資本というのは流通形態であつて、生産関係とはなんの関係もないものである」とか、「マルクスが第一巻第一章第一節で『価値の実体』を説き、第三節で『価値形態』を論じているのは根本的な誤りだ、まず『価値形態』を説明し、それから『価値の実体』を説くべきだ」という主張を執拗にくりかえし書きたてている。ところで、「形態」という論理的概念の意味内容を正確にとらえ、これとの関連において経済学における「形態規定」という重要な基本的概念の意味内容を科学的に正しく理解するならば、つまり、マルクス自身のあたえた科学的な概念規定に則して、右の氏の主張を見るならば、これほどでたらめな、完全に支離滅裂な、錯乱的文章はまたとないということが、掌を指すように明白である。ところが、それにもかかわらず、宇野氏は、あいもかわらずなんとかのひとつ覚え式に右の二つの「命題」をくりかえし唱え、氏の忠実な弟子どもは、これにしたがつて、「商品、貨幣、資本の流通形態」などといった錯乱の文字を臆面もなくひけらかしているのである。とすれば、真理は、つぎの二つのうちのどちらか一つ以外にはありえない。すなわ

ち、宇野氏にはこの二つの基本的な概念の意味が全然わけわからず、たんにこれらの言葉についての俗物的表象だけで右の「理論的」文章をでっちあげたものであるか、そうでなければ、これまでとはちがった、まさにマルクスを超越するような、これらの基本的な概念の内容をあらたに発見し、この画期的「概念規定」をもって右の「命題」をつくりあげたものであるか、そのどちらかでなければならぬ。前者の場合であるならば、もちろん、氏自身、科学者どころではなく、まやかしの俗物にほかならない事実があらわれざるをえない。それゆえ、いやしくも科学者をもって自ら任じているからには、第二の場合以外にはありえないと考えられる。それならば、なぜ、宇野氏は、これらの基本的概念についての氏独自の、「画期的」な解釈を公表しないのか？ 自分ではつきり理解しているならば、どのようにもわかりやすく説明できるはずである。ところが、やさしくもむづかしくも、一言半句も説明していないのである。そこで、やむなくわたしは、右の批判論文のなかで、宇野氏にたいして、「形態」および「形態規定」という言葉についてその内容をはっきり説明するように、できるだけ早い機会に一般に公表するように、強く要望したのである。ところが、それいらいすでに四年以上の歳月が経過しているのに、なんのこたえもないのである。平素、自分の主張にたいする批判的な文章に接すると、ほとんど間をおくことなく、すぐさまこれにたいする殲滅的反批判の文章を書いて隨意的発表ができるいろいろの雑誌に載せないではいなかった宇野氏である。なぜ、「形態」および「形態規定」という、簡単な基本的概念について、自分がつかんでいるとおもう意味を公表することをしないのか？ わたしのみるところでは、これらの概念について宇野氏は、なんら科学的な意味をつかんではいないし、人前に公表できるような解釈はもちあわしていないのである。もし、その貧弱きわまる俗物的表象を公開するとなれば、「宇野理論」の本質はたちまち世間にばれてしまうにちがいないのである。むしろ、

マルクスのうちだした基本的な概念については、いっさいその意味を説明することをしないほうが、得策なのである。自分でもわからない、俗物的頭脳にとつては縁遠い、マルクスの重要な基本的概念を適当にあらわして「理論的」文章を並べておけば、錯乱の文字と錯乱の文章は、その意味内容が完全にひとの理解能力を超越しているがゆえに、その「神秘性」をいや増して、その「教え」を垂れる「教祖」のありがたさはいよいよますますはかりしれないものとなる。「教義」をつくりあげているありがたい言葉や文句の本当の意味が、誰にでもよくわかるようになれば、それは、「教祖」の命とりというものである。なまじこんな命とりに手を出すことなどせず、信者徒党がもっている俗物的観念による解釈のままにして置き、また、マルクスの用法どおりに言葉を配置してマルクスの感じを適当に、「自然のままに」加味することにしたほうが、はるかに「経済的」であり、効果的なのである。基本的概念についてはこれっぽっちも説明せず、「理論」の発展・移行についてはすべてマルクスの叙述を暗黙の中に借用してそのあられもない錯乱と飛躍、断絶を補いかつごまかしているという、この手口は、右のような基本的概念についての理解の欠如および説明の意識的さばりと密接にむすびついているといつてよい。こうした一連の事実については、これからの論究がさらにいちだんと豊富な材料を提供するものと期待してよいのである。

ついでながら、経済理論にたいするわたしの考え方は、宇野氏のそれとは、まさに正反対である。マルクス経済理論を学び、その学んだところを公表するということは、『資本論』に出てくる基本的な概念——範疇——を生まつかじりで、しかもとびとびに並べて、適当に辻褄のあう俗物的解釈をつきまぜてその間をつなぐことで、まやかしの「体系」をつくりあげることとは、まったく縁はない。わたしの学び方とその曲りなりにも一応まとめあげた成果は、昭和四十七年（一九七二年）三月になって公刊された著書『経済学概論』として、読者の批判に供されている。

る。読者は、この著書の目次を一読されただけで、第一章「生産」、第二章「経済法則」にはじまり、第五章「社会主義社会の経済法則」、第六章「簡単な総括」に終る理論展開が、現実に人類社会の歴史的発展を規定すると同時にその発展にそつて自身をも発展させていく経済法則そのものの体系的叙述を指摘したものであることを容易に理解されよう。そして、経済学とは、この発展法則としての経済法則を正確に把握し、その発展の真実の担い手となるべき労働者階級にとつて、もつとも確実な理論的武器として役立たなければならないこと、またそのように役立つことこそが科学としての経済学の真の在り方であるということが、著者の念頭にあることも、おそらくは感じとられることであろう。この著書を刊行したのちに、なお本論稿を継続することをあえてしたのは、拙著の中に示された要約的な体系的叙述では、やはり、経済理論の詳細で正確な把握は無理であること、それぞれ個々の重要な側面についてはできるだけつっこんだ、詳細で厳密な論究がおこなわれてしかるべきだ、ということを感じてゐるものであるからである。

歴史的発展法則としての経済法則の解明は、範疇そのものの体系的叙述にとどまってはならず、人間の労働力の担い手としての人間のおかれてゐる歴史的・社会的地位とその役割の解明をこそそのかくされた真の課題とすべきだというのが、わたしのかねてからの主張であつて、このことを表明するため、わたしは、「人間経済学」なるものをとなえてきたが、この考え方は、わたしの経済理論を学ぶときの姿勢をつらぬいてゐるものであり、同時に、わたしのこれまでの拙ない諸労作を通じて一本の赤い糸のようにつらぬいてゐるものといつてよい。

本論稿をふたたび継続するにあつて以上のようなわたしの立場、基本的考え方をあらためてお伝えし、また同じ本論稿と右にあげた拙著とがたがいに相補う關係にあつて、同じ「人間経済学」なるものの論究にさざげられて

いるものであることを明らかにしておきたいとわたしは考えるので、つぎに、この二つの労作のはしがきからの簡単な引用をお目にかけたいとおもう。

（論文『人間の労働の経済学的考察』（一）の「はしがき」から）

「わたしは、かねてから、比喩的な意味で、『人間経済学』なるものを主張してきたが、この『人間経済学』という言葉は、経済学の対象がたんなる論理的範疇そのものではなくして、人間の関係およびその発展法則でなければならないということを強調するために用いられたのである。もっと詳しくいうならば、それは、経済を動かすもの、社会を動かすものは、なるほど金であり、資本であるが、しかし、とくに今日ではこの貨幣の力、資本の力にたいして人間の力が特別の意義をもっており、むしろ、この人間の力に依存しないでは、貨幣の力、資本の力が発揮されえないこと、しかも、現在は貨幣の力、資本の力を打ち倒して正しく人間の力を組織し、これを全面的に発揚すべき世界的段階にあること、したがって、真に経済を動かし、社会を動かすものとしての人間の意義を明らかにし、人間自身がその意義を認識し、その力を自覚し、その力をどのようにに結集し発揮すべきかということをも根本的に明確にすることこそが、ほかならぬ科学的経済理論でなければならぬ、ということを表示するためのものであったのである。このような『人間経済学』としての科学的経済理論の意義を明らかにしようというのが、本論のひとつのねらいである、ということができる。

それゆえ、本論の表題は、便宜のため一応、『人間の労働の経済学的考察』としてあるが、その意味するところは、正確に言えば、『人間、人間労働力および人間の労働についての経済学的考察』ということなのである」（本誌第十四巻第四号、五一六ページ）。

（著書『経済学概論』の「まえがき」から）

「この小著全体を通じて読者にはつきりとらえてもらいたいとわたしのねがっているのは、科学的経済理論の究極の目標が、たんなる論理の体系の構築の上にあるのではなく、まさに人間の生き方そのもの、人間社会のあり方そのものの解明の上にこそあるのだ、ということである。今日ほど人間の真の生き方が、真に人間社会の名に値する社会のあり方が、すべての勤労人民大衆にとって切実な問題となつてゐるときはない。一方にはあふれる物質的富を満喫しながら動物以下の生き方しかできない非人間

の群があり、他方には飢餓と窮乏の中で真実の人間として生きぬく群がある。一方ではおのれのかぎりない物欲、金欲をみたすために自然を破壊し万人を食い殺す権利がますますうちかためられるが、他方では万人を生かさんがために自分一個の生命を捧げる英雄の隊列もあとをたたない。人間とは、いったい、どういふものか？ 真に人間の名に値する生き方とは、真に人間社会の名に値する社会とは、いったい、どういふものか？——この、もっとも根源的な問題にたたくこたえるものは、道徳論でもなければ、観念的社会学などでもない。まさに、科学的経済理論こそ、正しい解答をひきだすための基礎を提供するものでなければならぬ。平素わたしは、経済学はすべからず人間経済学でなければならぬという主張をもっているが、この人間経済学なるものの真の意図がこの小著をとおして読者に多少とも伝わることであれば、幸いとおもう」(三四ページ)。

これまで、よぎないこととはいへ、本論稿の発表がながく中断されていたことをお詫びし、あわせて、目次について従来のもに若干の補足がおこなわれていることと関連して筆者の考え方や立場に変更をきたしたのではないかと、おこりうべき推測を考慮して、これらのものにはなんの変化もないこと、叙述の方針と方法もこれまでと同じく、忠実にマルクスのそれに則り、「人間経済学」の解明をめざして、必要かつ可能なかぎり詳細かつ厳密な論究と批判的検討をおしすすめていくものであることを明らかにし、完結まで相当長期間を要するとおもわれる本論稿の継続について読者諸賢の諒承をえたいとねがって、ここにあえて一筆(おことり)を挿入させていた次第である。

二 本来的私的所有のもとでの人間的労働

(6) 価値法則

(一)

本論稿第二章における「本来的私的所有のもとでの人間的労働」の考察は、(1)の「本来的私的所有の意味」からは

じめられ、ついで (2)「社会的富の規定」、(3)「商品生産における労働の二面性」、(4)「私的労働の社会的性格」、(5)「労働の対象化」まですすんできた。このうち(1)、(2)および(3)は、(4)と(5)の考察にとって必要不可欠の予備的説明をなすものとみることができるのであって、第二章での考察の重点は、(4)および(5)——さらに(6)以下——の上におかれなければならないし、また事実おかれているのである。とくに(5)においては、(4)の考察の結果をそのままうけついで「労働の対象化」について詳細な論究がこころみられ、この「対象化」との関連において、決定的に重要な意義をもつ諸側面、すなわち(1)「物による人間支配」(商品の物神的性格)、(2)「等置・交換の意味」、(3)「価値規定」および(4)「生産の無政府性」がとらえられ、これらの諸側面との全体的な関連において商品価値をただしく把握しなければならぬ、ということがあきらかにされた。そこで、これまでの考察の到達点でもあり、とくに(4)および(5)のなかで中心的な意義をもつ結論部分ともいふべきものとして、(5)のうちのつぎの一節を引用してかかげ、本論稿の進行途上における現在位置のほどを確認しておくことにしよう。

「私的所有の社会でも、それが、人間社会として成り立っているものである以上、各成員個人が人間的労働力の担い手として現実に機能しなければならず、人間的労働をみずからおこなわねばならぬこと、しかも、その人間的労働はかならず社会にとって有用な形態において支出されねばならぬこと、社会的総労働の一分子を担うものとして人間的労働力を流動させねばならぬこと——これらのことはまったく変わりがない。だが、ここでは、各成員個人はそれぞれ独立した私的所有者として相互に対立しており、その個人的労働力の支出つまり労働は、他人の意思にかかわりなく——むしろ、他人の利害に反して、というべきだが、——かれ個人の私的利益のためにかれ個人の計算においておこなわれ、そこには他の成員とのあいだになんらの社会的関連も見出されない。したがって、かれが人間としてなる

ほどその身体のうちにある人間的労働力をある一定の形態において流動させ支出したとしても、したがって同じ人間的労働力の担い手としてこれを一般的な意味で支出したとしても、その支出の形態が社会にとって有用であるかどうか、かれがたんに人間としてのみならず社会を構成する一分子として、社会的人間として現実に機能しているかどうかは、その流動そのものの、「生きた労働」そのものについては、けっしてわからない。いや、厳密に言えば、まだ社会にとって有用ではなく、一構成分子として機能しているのではない、というべきであろう。かれが、かれ自身の労働力の支出によって生産する物、つまりかれ自身の労働が対象化している生産物は、かれ個人のもの、かれ個人のためのものであって、けっして社会のものではない。かれの労働が社会にとって有用であり、社会的総労働の一環を担うものであるかどうかは、その労働の対象化しているところの生産物、しかもかれに私的に属するかれ個人のものである、私的に、他人につまり社会に提供し、その他人のものである他人の生産物と関係をさせ、相互に等置しあうことによって、はじめて実証される。これによって、かれはかれの私的労働の生産物を同じ抽象的・人間的労働の対象化したものとして他人の労働生産物と関連させ、相互におきかえあい、かくしてまた、かれの特定の具体的労働の生産物をば他人のための、社会のための使用価値として示し、かれ自身の私的労働が社会的総労働の一環を担うものであることが、事後的に示されることとなる。このような私的生産物相互の関連づけ、等置・交換が、私的労働の具体的な面においてではなく、生産物に対象化しているところの同じ抽象的・人間的労働という共通の性格にもとづいておこなわれるものであることは、すでにくりかえし説明されたところである。私的生産者は、その私的労働のうちにふくまれている抽象的・人間的労働を、他の私的生産者の同じく生産物に対象化した抽象的・人間的労働に関連させ、等置し、かくして対象化した労働を相互におきかえあうことによって、直接に・社会的にはなしに、間接に・私的

に、ある他人個人にとって有用なものをつくりだしたということを実に示すことによって、社会的総労働の一環を担うところのある特定の有用な形態の支出であったことを事後的に証明するのである。したがって、かれがかれ個人の必要をみたすために社会から受けとらねばならぬいっさいのものも、直接に・社会的にはなしに、まったく間接に・私的に、かれ自身の労働の対象化した生産物を私的・個人的に提供し、これにたいして私的・個人的関連を結ぶところの他人個人の労働の対象化した生産物をば、たがいとその生産物に流動させ対象化したところの人間の労働の量に應じて、私的・個人的にうけとることができ、またそれ以外に受けとりようはないのである。

私的生産者が他人の手から、つまり社会から私的・個人的にうけとることができ、うけとらねばならぬのは、ただひとえにかれ自身の人間的労働力の支出たる人間的労働によって、しかも、すでにその支出を終えてかれ自身の外部にかれの手を離れてある特定の使用価値・生産物に対象化しているところの人間の労働によってである。このようにして、労働生産物のうちに対象化し、そのうちにふくまれている抽象的・人間的労働が、労働生産物・商品⁽²⁵⁾の価値にほかならない。右にみたように、私的所有のもとでの私的生産者の私的労働が生産物に対象化した形態においてのみ社会的意味をもちうるということは、いいかえれば、私的生産者の人間的労働は労働生産物の価値とならねばならぬ、ということである。私的所有のもとで他人の労働生産物、したがって社会の富を獲得する力をもっている唯一のものは、なるほど生産者個人の人間の労働力によって、その流動・支出によってくりだされたものであるが、しかし、それはすでに生産者個人の手からはなれてその外部に独立している物に対象化してしまっているところの人間の労働力の流動・支出でなければならず、これがすなわち、労働生産物・商品⁽²⁶⁾そのものの価値なのである」(本誌第十六卷第三号、一九五一—一九六ページ)。

(25) ここに述べられている文章——「労働生産物のうちに対象化している抽象的・人間的労働が、商品の価値である」——については、おこりうべき誤解を避けるために、ぜひとも注釈をくわえておく必要があるとおもわれる。それは、この文章を文字どおりそのままのみにして、ここに述べられているのは、つぎのような主張、つまり、「対象化した労働」と「商品価値」とはまったく同格のもの、同じものであって、「価値」というのは、要するに「対象化した抽象的・人間的労働」の別名にはかならないのだ、という主張である、というように解釈を下す向きがないとはいえないからである。だが、右のような主張がとうてい成り立つものでないということは、私的所有以外の生産関係のもとでは、つねに「抽象的・人間的労働の対象化」がおこなわれねばならないが、その労働生産物はけっして価値をもつものでない、という事実を考えれば、ただちにわかる。商品の価値とは、人間が労働生産物にみとめる役立ちとかねうちとかではけっしてなく、商品そのものが、人間に対立して、それ自体としてもっている社会的な力であり、むしろ人間が否応なしにみとめざるをえない、そして、それによってふりまわされるところの、社会的なねうちである。抽象的・人間的労働は商品に対象化して商品そのものの価値となるが、しかし、抽象的・人間的労働の対象化がそのまま価値である、ということにはならない。「価値の実体」である抽象的・人間的労働と「商品価値」とのちがいと関連を的確に把握しておくことは、マルクスのうちたてた真に科学的な価値概念を正しく理解するうえで、不可欠の要件をなすものであるといつてよい。

価値法則そのものの考究にはいるにさきだつて右のように、「価値の実体」の内容を厳密に明示したのは、これの正確な把握を欠くときには、価値法則についてのいっさいの議論は、まったく空虚なおしやべりに墮ちてしまふほかないからである。⁽²⁶⁾

(26) 宇野弘蔵氏は、マルクスが『資本論』第一巻第一章第一節においてまず「価値の実体」を明らかにしていることに難癖をつけ、資本の『労働生産過程』においてこそ「価値の実体」は明らかにされるべきであるとの持論をくりかえし述べている。では、マルクスの欠陥をただすと称する宇野氏の価値についての説明は、どうなっているか？ ひとつ、氏の主著『新著『経済原論』についてみてみよう。

氏の著『経済原論』(岩波全書)のなかで「価値」という言葉が最初に現われてくるのは、その本論の冒頭の第一篇第一

章「商品」の最初のところにおいてである。

「商品は、種々異ったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら、すべて一様に金何円という価格を有しているということからも明らかなように、その物理的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有している。商品の価値とは、使用価値の異質性に対して、かかる同質性をいうのである。それは商品が、その所有者にとつて、その幾何かによって他の任意の商品の一定量と交換せられるべきものであることを示すものにほかならない。またかかるものとして価値を有しているわけである」(岩波全書『経済原論』、二二ページ、傍点―山本)。

いったい、ここにあるのは、どういうことを説明した文章であろうか？ 宇野氏は、まず商品が「金何円という価格」をもっているという事実をあげる。ここから、すべての商品は「一様に金何円という価格をもっている」という点でのすべての商品の「同質性」なるものを指摘する。つまり、すべての商品が「一様に金何円という価格をもっている」という「質」を同じくしていること、その同質性をもって商品の「価値」である、と言うのである。これは、いかなる点からみても、完全なタワゴトであり、まやかしである。

第一に、「同質性」をもって「価値」だというのは、なんの説明にもならない。つまり、同じく「価格」をもつというのであるから、「同質性」ははじめからわかっている。だが、「質を同じくする」ことは、「同質」であるということだけを示すものであって、なんら「価値」にむすびつくものではない。第二に、「価格」なるものは、すでに商品が「価値」をもっていることを社会的に妥当に表現する形態である。だから、はじめに「すべての商品が一様に金何円という価格をもっている」という文章をかかげているのは、「すべての商品は価値をもっていて、その価値を金貨幣で一様に金何円として示している」と言っているのと同じである。はじめに「商品はその価値を金何円で社会的に示す」と述べ、「この金何円で同じ質のものとして示されること、つまり、その同質性を価値というのである」と見得をきる先生がいたならば、ひとは、このおしゃべりをなんと評するであろうか？ これでは、下手くそなトゥトロギーよりもっと程度のわるい、詭弁でしかない。第三に、宇野氏は、「同質性」だけではいかにも貧弱だと感づいたものであろうか、「それは商品が、その所有者にとつて、その幾何かによって他の任意の商品の一定量と交換せられるべきものであることを示すものにほかならない」と付け加えている。ここでの「それ」がなにを指すか、はっきりしない——いや、はっきりさせない——ところが、氏の所論のミソであるが、この「それ」以前にある名詞として、「それ」に該当するものとしては、「価格」か、「価値」か、あるいは「同質性」か、この三つをおいてほかに

はありえない。だが、この三つのうちのどれをあてはめてみても、右の文章が完全なタワゴトか、愚劣なトゥトロギーでしかないことは、通常の平均的思考能力を有するものには、あきらかである。「他の任意の商品の一定量と交換せられるべきものである」というのは、商品所有者にとって、その商品が「交換価値」をもっているということである。ところが、その商品の「交換価値」を示したものが、ほかでもない、その商品の「価格」なのである。だから、右の「それ」は、「価格」ではありえない。また「同質性」でもありえない。なぜならば、すでに冒頭で「様に「価格」をもつという「同質性」が指摘されているからである。では、残るところは、ただひとつ「価値」であるが、もし、そうであるとしたならば、「価値」を「交換価値」によって説明することになり、さきの「様に価格をもっている」ということの拙劣なくりかえしか、または、「価値」を「交換価値」と混同するものとならざるをえない。これを要するに、右の第一章冒頭における価値の説明は、マルクスのそれとはくらべものにならないほど混乱したタワゴトでしかなく、「価値」については「同質性」以外になんの知識をも持ちあわしていないブルジョア学者が「交換価値」「価格」をもってきて、これを商品の「価値」だと称しているのと同列の、低劣きわまる俗物的観念を露呈しているにすぎない。

ところが、あきれたことに、この「すべて一様に金何円という価格を有している」という「同質性」ひとつで「価値」を説明しただけで、あとはなにひとつ「価値の実体」についてひと言も説明しない論者が、いきなり、「特殊の価値形態」とか「価値表現」などという文字をつかつて、価値形態についてのマルクスの説明を真似ながら、「かくして商品は、マルクスのいわゆる一般的価値形態を展開する」(前出、二七ページ)などといった「結論」を並べたてている。「すべて一様に金何円という価格を有している」という「同質性」を指して「価値」だといった御本人が、今度はその反対に、商品は、「金いくらということ」で、その価値を表示する(前出二八ページ)という「落ち」を、平気で並べたてているのである！

ところで、宇野氏はもともと、「第一章 商品」のところで「価値とはなにか？」という、「価値の実体」を明確にすることはできないし、またそれは、その場所でもありえない、「商品によって商品を生産する」「資本の生産過程」においてこそ、「価値の実体」ははじめて明確にされうるし、そこで論証されなければならないという、マルクス論難をいつも口癖のように言いたてている論者であるから、右のような「すべて一様に金何円という価格を有している」という「同質性」をもって「価値」なるものを説明しようとして、このうえもなく拙劣で支離滅裂なトゥトロギーとタワゴトをあえて並べたてたのは、つまり「第一章 商品」では「価値」の説明をあたえることが絶対にできないということをやわざと示してくれた例解ともう

けとれるのである。それにしてもなおかつ、このいわば例解的な拙劣きわまるトットロギーによつて「価値形態」なるものを説明しつくすとは、なんと、氏の「論理的」思考能力の「超能力」であることか！宇野氏は、右のマルクス論難を忠実に守つて、「資本の生産過程」に行きつくまでは、「価値」については固く口をとどして、右の「同質性」のほかには一言半句も説明をあたえようとはしていないのである！

では、氏の主著の第二篇第一章「資本の生産過程」の第一節「労働生産過程」では、どのようにして、「価値の実体」の説明を展開しているであろうか？といえ、なんとそれらしきものは、ここでもひと言も見出されないものである！たんに「価値の実体」についての説明が欠けているだけでなくて、いきなり、つぎのような文章がとびだしてくるのである。

「……………例えば、今仮りに六キロの綿花と一台の機械とをもつて六キロの綿糸を生産するのに六時間の労働を要するものとする。勿論、労働手段は一台の機械に留まるわけではないし、また綿糸の生産中に屑綿となるものもあるわけであるが、簡単にするためにこういうように仮定したのであるが、この場合、六時間の紡績労働の生産物である六キロの綿糸は、単に六時間の労働の対象化されたものではない。六キロの綿花の生産自身に、例えば二〇時間の労働を要したものと、また機械の生産にも一定の労働を要し、この綿糸の生産中に消耗せられた部分を、例えば四時間の労働の対象化されたものとする、生産手段自身ですでに二四時間の労働を要しているわけである。したがって綿糸六キロは三〇時間の労働生産物ということになる。……………(中略)……………いうまでもなく生産手段の生産に要する労働時間は、紡績過程においては単に新生産物の生産に要する労働時間の構成部分をなすものとして、すでにその前に与えられているものにすぎない。かくて紡績過程の労働は、一方では綿花を綿糸にかえ、綿花や機械等の生産手段に要した労働時間を新生産物たる綿糸の生産に要する労働時間の一部分とする、マルクスのいわゆる有用労働として機能し、同時にまた紡績過程の労働時間をも綿花その他の生産手段の生産に要した労働時間と一樣なるものとして、新生産物の生産に要する労働時間とする、マルクスのいわゆる抽象的人間労働として機能するといふ、二重の性質を有しているのである。前者が特定の生産物、ここでは綿糸であるが、その生産に適合した特定の労働の面をなすのに対して、後者は綿花や機械の生産に投ぜられた労働と同様に、人間労働力の支出として、抽象的人間労働の面をなすわけである」(前出、五〇—五二ページ、傍点—山本)。

ここに引用した中で、わたしが傍点をつけておいたところをよくお読みいただきたい。宇野氏は、まず、「六キロの綿糸を生産するのに六時間の労働」を要した、「六時間の紡績労働の生産物である六キロの綿糸」と言っている。つまりこの場合の

労働は、「紡績労働」という文字によって示されているように、明白に、「紡績」という特定の具体的形態をとった有用労働である。「綿糸の生産に要する労働」が「紡績労働」であると同様に、「綿花を生産する労働」も特定の具体的労働であり、たとえば「綿花栽培労働」であり、「機械を生産する労働」も特定の具体的労働、たとえば「機械製作労働」である。これらはいずれも、「紡績」、「綿花栽培」および「機械製作」という特定の形態をとった労働であって、質的にまったく異なったものである。これらの具体的形態を異にした労働は、簡単に、六時間とか二〇時間とか四時間とかいったように、量的に比較などできるものではない。量的比較は質的同一性を前提するものでなければならぬのに、これらの労働はいずれも質的に完全に異なったものであるからである。宇野氏が、これらの質的差異をこっそりと消してしまつて、これを簡単に同じ質のものとして量的比較をしているのは、まぎれもない論理的ペテンである。宇野氏は、マルクス『資本論』の説明を読んで、マルクスがその冒頭の第一章第二節で説明している「商品に表示された労働の二面性」をはやくも頭の中にこっそりと入れておき、さて読者に対しては、第一章では抽象的・人間の労働の説明はできないとか、そこで「価値の実体」としての「抽象的・人間の労働」を明らかにするのは論理的に正しいものとはいえないとか、例によって例のごとき難癖をあれこれ並べておき、さて乃公自身が肝腎の「資本の生産過程」において「価値の実体」を説明しなければならない段になると、こっそりマルクスの第一章第二節のなかの説明を借りだしてきて、「紡績労働」、「綿花栽培労働」および「機械製作労働」を目して、手前勝手にその具体的形態を捨象してしまつたもの、つまり、いずれも同じ「抽象的・人間の労働」だとして、それらの量的比較をやり、こうしてこっそり剽窃したマルクスの「労働の二面性」にかんする説明をもとにして、「量的計算」をしてしまつたあとで、なんと空々しくも、「かくて紡績過程の労働は、一方では綿花を綿糸にかえ、綿花や機械等の生産手段の生産に要した労働時間(19)を新生産物たる綿糸の生産に要する労働時間の一部分とする、マルクスのいわゆる有用労働として機能し、同時にまた紡績過程の労働時間をも綿花その他の生産手段に要した労働時間と一様なるものとして、新生産物の生産に要する労働時間とする、マルクスのいわゆる抽象的人間労働として機能するという、二重の性質を有しているのである」という「結論」をかかげているのである。ここにくだりはちょっとみると、マルクスが述べているところと大差はなく、したがって一応まともなもののおもわれる。だが、すこしく注意して読みかえすならば、ここにあるのは、マルクスの明確な叙述とはまったく違ったものであって、むしろマルクスの述べているところと正反對の主張でしかないことがわかつてくる。このなかには、例によっていろいろの誤解と曲論がごたまぜにつめこまれているのであるが、そのうちの目ばしいものをつぎに二つあげて、説明

しておこう。

1 「労働の二面性」というものは、あらゆる人間的労働力の支出について実存しているものであって、しかも人間はその二面性を、——なんらかの形で——認識していなければ、およそ「労働」は成り立たないのである。はじめに具体的労働と抽象的労働という労働の二面性を正確に把握しておくことが肝要なのであって、これを「資本の生産過程」のところにいつて、やっと見出すなどというのは、まったく逆立ちした議論であり、「理論的にも、事実的にも」まったく実証されない、完全なタワゴトにすぎない。

2 ところで、肝腎の「抽象的人間労働」についての理解が問題である。ここに宇野氏がことさら「マルクスのいわゆる抽象的人間労働」などという言葉をならべて、いかにもマルクスの説く「抽象的・人間的労働」は完全に理解しているのだというようなポーズをとっている。だが、残念ながら、これらの文章は、宇野氏がこのマルクスの「抽象的・人間的労働」をまったく御存じないということを動かしがたく実証している。第一に、「マルクスのいわゆる抽象的人間労働」という乃公自身の文句がこれを示している。「労働の二面性」はたんに言葉として、または観念としてあるのではけっしてない。それは実在しているものであり、人間的労働についても本質的な事実なのである。だから、「マルクスの」はまったく不要であり、誤りである。とりわけ「いわゆる」にいたっては、氏の国語的濫用と論理的錯乱を示すだけの意味しかもたない。人間的労働のもっとも本質的な側面を示した言葉に「いわゆる」をつけるということは、その本質的な側面がそのものとして客観的に実在しているものではないということ、いいかえれば、その言葉が示している客観的事実はなく、したがってそのような言葉をつかうのは、正確な規定ではないということを示すことになる。たとえば、「いわゆるマルクス経済学者」という言葉を考えてみるがいい。これは、その人物が真正のマルクス経済学者ではないこと、こうしたりっぱな名称を自分も世間もつけてはいるが、実は、その中味はまっかなにせものだということを的確に示すものであって、そのために「いわゆる」がついているのである。第二に、「抽象的・人間的労働」についての無知は、「同時にまた紡績過程の労働時間をも綿花その他の生産手段の生産に要した労働時間と一樣なるものとして、新生産物に要する労働時間とする、マルクスのいわゆる抽象的人間労働……」という文章がこれを裏づけている。つまり、宇野氏は、「紡績過程の労働時間」も「綿花、機械の生産に要した労働時間」も「一樣なもの」であって、ともに「綿糸の生産に要する労働時間となる」ところに、「マルクスのいわゆる抽象的人間労働」が存すると主張している。「労働時間」という「量的規定」を「抽象的人間労働」という「質的規定」とことさらに混同して

いる、この見えすいた錯誤とすりかえは問題にすまい。「紡績過程の労働時間」と「綿花、機械の生産に要した労働時間」とが「一様なもの」であるのは、「紡績労働」も「綿花栽培労働」も「機械製作労働」も、ひとしく「一様に」「労働の二面性」をもっているからであり、またその「二面」をもつものとして「一様な労働」なのである。そして、この「一様な」二面性は、「資本の生産過程」がとりあげられるよりもずっと以前に、人間の労働そのものの基本的意味を考えるべき最初のところであつた昔に明らかにされているのである。「ともに綿糸の生産に要する労働時間となる」などということをおいて「抽象的人間労働」の説明にあてようとしているのは、かえって「生産過程」一般についての初歩的知識の完全な欠如を示すもので、読む人の嘲笑を誘うだけである。右の二つの「労働時間」をもつてきて、「ともに綿糸の生産に要する労働時間となる」という主張は、「生産過程」の二面性についての無知、したがって「労働の二面性」についての無知、「生きた労働」と「死んだ労働」との区別と関連についての無知、「価値」と「価値の実体」との区別と関連とのみごとな無知を、このうえもなく的確に示すものといつてよい。このようにしてみると、宇野氏が、「資本の生産過程」という正常な科学的用語を採用しないで、ことさら混乱した「労働生産過程」などという珍語を發明しているのは、右のような一連の典型的無知をもつて作詞作文する「コツ」を示しているものといつてよい。

ところで、右のように、「労働」と「労働の対象化」との区別と関連も、「価値」と「価値の実体」との区別と関連も、いさゝいわけわからずに、漠然とあいまいな「労働時間」という迷語でこうした基本的な諸概念のすべてをごたまぜにあらわしておいて、——右にあげたような肝腎な基本的諸概念はそれまでにひととつとして用いられていないのである!!——時と処に応じてこれらのうちの都合のよい意味の言葉に当るようになおわせて適当な作文をしていたものが、右の第一節の最後のところ、突如として、

「一日の労働をなす労働力の再生産に要する生活資料を一定とすれば、あるいはまた生活資料のある程度の増加を前提しても、労働の生産力の増進によつて、生活資料の生産に要する必要労働時間は減少し、剰余労働時間は増加し、種々なる使用価値を有する剰余生産物を増加することができる。」(傍点—山本)

というように述べることで、ここに、「社会的必要労働時間」とか「剰余労働時間」とかいう、これまでに氏の論述のなかで一度もお目にかかったことのない「マルクスの」術語がなんの説明もなしにつぎつぎと飛び出してき、これらの「術語」の突如たる出現を唯一の手がかりとして、たちまち一挙にして、「価値」と「剰余価値」という言葉をつかわずしてしかもその

事柄を同時に説明して片づけてしまふという芸当を演じてみせる。それは、右につづく第二節の第二パラグラフに展開されるいわゆる「価値形成増殖過程」なるものの説明においてである。

「今、労働力の再生産に要する一日の生活資料が六時間の労働で生産され、その代価を三志とすれば、前節で述べた綿糸の生産を資本家的に行う場合、その生産に二四時間を要した綿花、機械等の生産手段には一二志を支払い、その生産に三〇時間を要した六キロの綿糸は一五志の価格をもって販売されれば、いずれも商品として、その生産に要した労働時間を基準にして売買されることになるわけであるが、それは労働者がその労働力の代価として三志が、綿糸の生産をなす紡績資本家にとっては、その生産物たる六キロの綿糸の代価の内、四・八キロの綿糸の販売によって生産手段の代価一二志が回収されるのと同様に、一・二キロの綿糸の販売によって回収され、労働者にとっては、自己の労働六時間の生産物を商品交換を通して生活資料として得る代価であるということによるのである。三志は、この生産過程を基礎にして展開される商品交換関係の媒介をなすものにすぎない。……………勿論、資本家としては労働力と生産手段との購入に要した貨幣をその生産物の販売によってさうる限りより多くの貨幣として回収すればよいのであるが、労働者がその労働力の再生産に要する生活資料は必ずえなければならぬという事情を基礎にして、資本は、その生産物をその生産に要する労働時間を基準として互に交換するということになる。……………」

しかし一日の労働力を商品として買入れた資本家は、労働力の消費を綿糸六キロの生産に要する六時間に留めなければならぬ理由は無い。また労働者としても、その労働力を商品として販売せざるをえないという事情は、その労働時間を自己の生活資料の再生産に要する労働時間で切替えることを許すものではない。今、若し一日の労働が一二時間行われるものとする、紡績資本家は、一人の労働者の一日の労働によって、一二キロの綿糸を生産しうることになるであろう。すなわち労働力には三志を支払い乍ら、生産手段に要する資本は二四志となり、その生産物は三〇志に販売しうるわけであって、三志の剰余価値をうることになるのであるが、それは生産手段を紡績資本家に販売する他の資本家は勿論のこと、労働力を販売する労働者に対しても、その商品を安く買って、生産物たる綿糸を、それを購入する他の資本家その他の買手に対して高く売るといふことからえられるというものではない。その価値を支払って買入れた労働力が、資本の生産過程において新しく形成する価値によって、資本自身がその価値を増殖するのである」(前出、五三一五五ページおよび五九一六〇ページ、傍点およびゴシック体)

山本)。

ごらんのように、宇野氏は、まず「生活資料を生産する労働」とシリングとの関係をそれまでまったく説明することなしに、いきなり、「一日の生活資料が六時間の労働で生産され、その代価を三シリングとする」と述べて、その場合には、「その生産に二四時間を要した生産手段に一二シリング支払われ、三〇時間を要した六キロの綿糸が一五シリングで販売されれば、いずれも商品として、その生産に要した労働時間を基準にして売買されることになる」というように説明している。このような説明は、いうまでもなく、完全に逆立ちした、まやかしである。なぜならば、「生活資料を生産する労働」の六時間と、その「生活資料の代価」である三シリングとはなんらの必然的関連も示されていないからである。「生活資料を生産する労働」が六時間であろうと、一〇時間であろうと、その「生活資料の代価」は、それとは別に、市場での需給関係でまざる。宇野氏は、ことさら「代価」とか「販売価格」とか「売買」とかいったような文字を配しているが、これらの言葉は「価値」とはまったくちがったものである。だから、もし、その「生活資料の代価」が三シリングでなくて、六シリングであったときには、どういうことになるか？ 二四時間を要した生産手段に一二志支払われると、どうして「その生産に要した労働時間」が「基準に」なるというのか？ 「労働時間」と「シリング」とは、どういう結びつきがあるというのか？ ——ごらんのように、宇野氏は、わざと「価値」という基本的な概念をつかうことをさけ、しかも「価値」に相当する事柄を「代価」とか「販売価格」とか「売買価格」とかいった言葉をつかって言いあらわしているのである。こういう俗物にびつたりの「販売価格」という言葉で、実はマルクスの「価値」概念の説明を剽窃してきて説明しようとする場合には、必ず無理が生ずる。その無理をむりやりおしとおすには、どうしても逆立ち論法が必要となる。そのことは、「その生産に三〇時間を要した六キロの綿糸が一五シリングの価格をもって販売されれば、その生産に要した労働時間を基準にして売買されることになるわけである」といった説明にあらわれている。「その生産に要した労働時間を基準にして売買される」というのは、「その価値どおりの価格で売られる」、つまり、「価値が価値に一致する」ということである。右の説明は、ただしくは、「販売価格が価値どおりとすれば、六キロの綿糸の価格は一五シリングとなる」でなければならぬ。ところが、以上の説明を通じて「労働時間」と「価値」とのあいだの必然的関連についての説明はひと言も出てこないのである。「価値」という言葉も、冒頭の「同質性」だけでお茶を濁したあとは、「価値」とか「代価」とかでとってかわられている。ところが、この「同質性」であるだけの「価値」が、ここに來て突如として、「三志の剰余価値」という文字となって飛び出してくる。いったい、「剰余」の「同質性」とはどうい

うことか、ひとつよく説明してもらいたいものである。

以上によつて、よくおわかりのように、「資本の生産過程」においてこそ「価値の実体」の説明はなされるべきで、マルクスのように冒頭の「第一章 商品」のなかでなされるべきでないという、宇野氏の主張は、まったくのまやかしであり、ためにするおしゃべりでしかないことが、あきらかである。宇野氏は、マルクスの第一章第一節の中の「価値の実体」についての説明をこっそり自分の頭の中にしまいこみ、ひとにはこれとはつきり説明することなしに、このマルクスの説明を前提とした議論を——それも、しばしば逆立ちした形で——並べ、しかも、「価値の実体」についてなにひとつ説明らしい説明もしないままに、たちまちマルクスの「剰余価値」という言葉に飛びうつつてしまふのである。マルクスの説明をそっくりそのままのみにしていながら、そのことをひたかくしにしておき、その無断で借用したところをまったく混乱した形で小出しに出して、「同質性」などという、ブルジョア経済学をつくりの「価値」概念でつじつまを合せるのが精一杯という、自分自身の醜態を棚に上げて、当のマルクスに向つて、やれまちがっているとか、「価値の実体」の説明を最初にしてるのは逆立ちしているものだから、悪口を並べたてているとは、なんと恥しらずな思いあがりであらうか。

さて、当面の主題である価値法則についてであるが、すでに前節のなかに「(3) 価値規定」の項が設けられていて、そこできなかに詳しい考察がおこなわれているのである（本誌第十六卷第三号、二〇五—二〇八ページ）。ただし、そこでの考察は、人間的労働の質——熱練および強度——についてその社会的平均的な質という側面が中心的位置を占めていて、その他の側面は意識的にとりあげることをしなかった。ここでは、右の「(3) 価値規定」の項におけるさきの考察を念頭において、あらためて、価値法則の重要な諸側面をその全体的な関連において考察することをこころみることにしよう。

マルクスが価値法則についての基本的な説明を明確な形で示しているのは、いうまでもなく、『資本論』第一卷第一章第一節の後半においてである。この第一節の前半において、マルクスは、まず「価値の実体」を明らかにし、こ

れまでの古典派経済学がとらわれていた非科学的な「価値」概念を根本的にくつがえして、まったく新たな、真に科学的な価値概念をここにうちたてている。この科学的概念は、「一様に金何円という価格を有している」点での「同質性」などという、得体の知れない、俗物的「価値」概念にとらわれているような手合には、とうていわかりっこないものである。マルクスは、「価値の実体」についての考察をまとめて、まず、「かくして、ある使用価値または財がある価値をもつものは、そのうちに抽象的・人間の労働が対象化、または物質化されているからにはかならない」(インスティトゥット版第一巻、四三ページ、傍点はインスティトゥット版のもの)と述べ、この「価値の実体」の究明にもとづいて、ただちに、つぎのような価値の大きさの規定、つまり価値法則の内容を明らかにしている。

(27) 「価値の実体」が究明されていればこそ、価値の大きさの規定が、ここからただちにひきだされうるし、またひきだされなければならぬ。「価値の実体」をただの「労働」ととらえているようでは、よくいったところで、古典学派のブルジョア的水準にとどまるしかない。いわんや、「一様に金何円という価格を有しているという、同質性」などという、低俗觀念にしがみついているようでは、価値法則がどのような広がりと深さをもっているかはとうていわかりっこないのである。

「では、その価値の大きさ、はどのようにしてはかられるか? それにふくまれている『価値を形成する実体』、すなわち労働の分量、によってである。労働の量そのものは、労働の時間的、継続によって度量されるのであって、労働時間はまた時間・日などのような一定の時間部分をその度量基準としている」(前出、四三ページ、傍点はインスティトゥット版のもの)。

ここで、「価値の大きさは労働の分量、によってはかられる」といわれているその「労働」とは、いうまでもなく、たんなる労働ではなく、また「紡績労働」などという具体的労働でもなく、明確に抽象的・人間の労働を指している

ものである。それは、「生産的活動の規定性、したがってまた労働の有用的性格」を捨象したところの、人間的労働力の支出、「人間の脳髓、筋肉、神経、手、足などの生産的支出」である。ここでけっして見落してならないのは、「価値の実体」の把握が、マルクスによつてはじめて解明された「労働の二面性」の正しい理解にもとづき、またこの「労働の二面性」の理解とかく結びついたものであるのとまったく同じように、「価値の大きさの規定」すなわち「価値法則」の把握もまた、「労働の二面性」の厳密・正確な把握にもとづき、かつ、これと緊密に結びついたものであるといふことである。⁽²⁸⁾

(28) マルクスが第一章第一節にすぐつづいて「商品に表示される労働の二面性」と題する第二節をおいて、「労働の二面性」の徹底的な究明をあたえており、この第二節の冒頭で、この「労働の二面性」の把握こそがまさに「経済学の理解にとって決定的な跳躍点」であると明記しているのは、そもそも、科学的な価値概念そのものからして、「労働の二面性」の正確で十分な理解によつてはじめて確立されうるものであり、またその理解に結びついて確立されなければならないといふことを、このうえもなくはっきりと示しているものである。マルクスが、一八六七年八月二四日付エンゲルスあての手紙のなかで、「僕の本のなかの最良の点は次の二点だ」と述べて、まず第一に、「第一章ですぐに強調されているような、使用価値で表わされるか交換価値で表わされるかに従つての労働の二面性」をあげ、これについて、「これには事実のいっさいの理解がもつていゝる」(傍点はすべてマルクスのもの)と指摘しているのも、第一には、経済理論体系における最初の基本的な概念、すなわち、価値概念の理解がすでにこの「労働の二面性」の的確な把握にもとづいていゝるものだ、といふことを示しているものである。この点からみても、「すべて一様に金何円という価格を有している」といったような「同質性」をもつてきて「価値」の説明をしただけでだちに「価値表現」に飛び移っているような、宇野氏の論じ方が、マルクスの叙述とはまったくくらべものにならないほど、非科学的で支離滅裂であること、マルクス理論をまったく踏みつけにしながらしかもマルクスの叙述順序を真似て言葉をつなぎあわせて「理論的」作文を事としているだけのものだ、といふことはきわめて明白である。右のような「同質性」で価値を説明していながら、マルクスの「価値の実体」の究明を意識的になおざりにしているといふことは、い

ゆる、宇野理論なるものの「価値概念」が、マルクスのそれとは似ても似つかないもの、「効用」という「同質性」にとびついたブルジョア俗流経済学の「価値概念」と完全に同じものをふりまわしているにすぎない、ということを示している。つまり、俗流経済学者は正直に、マルクスの価値概念とちがっていることを公然と言明しているのにひきかえ、右のような俗流「価値概念」をふりまわしてこれこそマルクスの価値概念のだとふれまわり、その売り出しにつとめているところ、いかさま師のいかさま師たる所以が存するといつてよい。

では、価値法則の内容は右のような「価値を形成する実体」＝抽象的・人間的労働の分量によって価値量が度量されるということ、つくされるであろうか？ 「価値と価格との一致」をもって価値法則であるとするような、まったくでたらめな議論にふりまわされない論者も、たいていの場合、この「労働量による価値の規定」ということで価値法則の内容はつきっていると考えている。しかし、これでは、古典派経済学者の唱えた「価値規定」と同じ水準に立つものでしかない。なるほど彼らは、労働の二面性を明確に意識せず、また「労働の対象化」とその意義を把握することはできなかったが、しかし「同質性」などにしがみつく俗流論者などとはちがって、「価値」を分析してその内容である「労働」とをえ、「価値の大きさ」が「労働の分量」によって規定されることをつかみ、これをこれらの「労働価値」論の中心にすえ、この基礎の上に経済理論体系をうちたてようとつとめたものである。それゆえ、「労働の分量による価値の大きさの規定」ということをもって、マルクスの「価値法則」の内容のすべてだと説明するのは、その内容をゆがめるものといわざるをえない。では、マルクスの「価値法則」についての理解の眼目は、どこにあるか？ といえば、それは、ほかでもない、右の叙述にすぐつづいて展開されるマルクスの説明の中にはっきりと示されているのである。なるほど抽象的・人間的労働は「支出の形態にかかわりのない人間的労働力の支出」であるが、しかしその人間的労働力は、いったい、どういうことになっているのか？ それは、社会を構成する各成員が個

々別々にその身体のうちに担っている人間的労働力、つまり個別的労働力をおいてほかにはありえない。ところが、これらの個別的成員の担っている個別的労働力は、けっして同一のものではなく、千差万別といつていいほどちがっているのである。個別的労働力に差異があれば、その支出・流動である人間的労働そのものにも差異がなければならぬし、それらの異なった人間的労働の対象化そのものにも差異がなければならぬ。ところが、商品がもっている価値、商品そのものの社会的力である価値は、すべて同一のものであって、どの商品の価値もまったく同じ質のものである。質を異にする個別的労働力の支出が、はたして、質を同じくする商品価値を形成しうるであろうか？

(29) このような問題は、論者が「労働価値」説の立場を意識的に採るかぎり、かならず提起されなければならないのであって、この根本的な問題を明確に意識し、これを取りあげてこれにたいする自身の解答を提示しようとしないうような論者は、自分ではなんと自称しようとも、俗流経済学者のはしくれでしかない。たとえば、A・スミスは、その名著『諸国民の富』の第一篇第五章の冒頭で「労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度である」と述べながら、これにつづく叙述においては、つぎのように「労働」の質的差異を説明しているのである。——「しかしながら、たとえ労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度であっても、商品の価値がふつう評価されるのはそれによつてではない。二つの異なる労働量のあいだの割合を確定することはしばしば困難である。二つの異なる部類の仕事についてやされた時間だけでは必ずしもつねにこの割合を決定しないであろう。耐えしのばれた辛苦、または働かされた創意のさまざまな度合もまた、同様に計算にいれられなければならない。一時間のつらい作業のほうが、二時間のやさしい仕事よりもより多くの労働をふくんでいるかも知れないし、また、それを習得するのに十年の労働がかかる職業についての一時間の精励のほうが、日常的でわかりきった仕事についての一カ月の勤労よりも多くの労働をふくんでいるかも知れないのである。けれども、辛苦または創意のいづれかについて、ある正確な尺度を発見するのはたやすいことではない」(キヤナン版(二巻本)、三三三ページ、大内・松川訳『諸国民の富』I、一〇七ページ)。

みられるように、「交換価値の実質的尺度」である「労働」そのものも、いろいろな差異があつて、たんに「労働時間」でははかられないことを、スミスは明確にとらえ、ついで、「商品の交換価値」は、「労働の量」よりも「貨幣の量」によつてし

ばしは評価されるといふ歴史的事実をあげ、この「貨幣」もその価値がつねに変動するために、「他の諸物の正確な尺度にはけつてなりえない」点を指摘し、ふたたび「労働」にたちかえて、つぎのように述べている。

「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、といつてさしつかえなからう。かれの健康、体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練と技巧が通常の程度であれば、かれは、自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならぬ。かれが支払う価格は、それとひきかえにかれがうけとる財貨の量がどれほどのものであるうとも、つねに同じであるにちがいない。実際のところ、この価格が購買するこれらの財貨は、あるときはより多量であらうし、またあるときはより少量であらうが、変動するのはそれらの財貨の価値なのであって、それらを購買する労働の価値ではない。いつどのようなところでも、えがたいもの、つまり多くの労働をついやさなければ獲得できないものは高価であり、たやすくえられるもの、つまりきわめて僅少の労働で手にいれられるものは安価である。それゆえ、それ自体の価値がけつて変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによつていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうる、究極の、しかも実質的な標準である。労働はいっさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(前出、三四—三五ページ、大内・松川訳、一〇八一—一〇九ページ、傍点—山本)。

ごらんのように、スミスは、「健康、体力および精神の平常状態、熟練と技巧の通常程度」という基準に照らして、はじめ「等量の労働」は、「等しい価値」である、と主張している。これらのスミスの叙述のなかには、労働そのものと労働の対象化との混同、労働の価値と労働力の価値との混同、投下労働と支配労働との混同といったような、重大な誤りが見られ、これらはすべて、「労働の二面性」と「労働の対象化」とを明確にとらええない、スミスの限られたブルジョア的に狭い視野にとらわれた「価値」概念によつて規定されざるをえなかったものであるが、しかし、それにしても、商品の「価値」の「実質的な標準」としての「労働」そのものの質的規定にその考究の眼を向けているのは、かれがやはりすぐれた経済学者であつたことを示すものといわなければならない。

このスミスの的確な指摘にくらべれば、「労働」そのものの質的規定がその眼に入らず、むしろその質的規定を意識的におしのけて、ただの「労働」にしがみつき、「商品の価値はその生産に要する労働時間によつて決定される」ということだけで事をすましている宇野氏の後述の主張は、くらべものにならないほど低劣なものといつてよい。

マルクスは、この決定的に重大な問題の所在を読者にはっきりとらえさせるために、右の説明にすぐびきつづいて、ことさらに、つぎのような文章をかかげているのである。

「一商品の価値がその生産中に支出される労働の量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰、または不熟練であればあるほど、かれはその商品を完成するのにそれだけ多くの時間を必要とするので、かれの商品はそれだけ価値が大きい、というように思われるかもしれない」(前出、四三ページ、傍点―山本)。

ここで「怠惰」と「不熟練」との二つがあげられているのは、たんなる言葉の綾としてではけっしてない。それは、まさしく「労働」そのものの質を示すものである。「抽象的・人間的労働」そのものの質的規定としては、労働の「強度」と「熟練」との二つがあり、またこの二つ以外にはありえない。「強度」の低いのが「怠惰」であり、「熟練」の乏しいのが「不熟練」である。各個人の担っている個別的労働力そのものにはさまざまなちがいがあつて、その個別的な人間的労働力そのものの支出、すなわち人間的労働そのものも、質を異にせざるをえない。その質的差異を明確に「強度」と「熟練」とにおいてとらえるべきことを示したのが、右の文章であり、しかもそれは同時に、このような質的差異がいかにして質的に同じ「商品価値」を形成するかという、肝腎の問題を読者につきつけているのである。そして、このもっとも重要な問題にたいする考え方と解答とを示したのが、これにつづくつぎの四つの文章である。後段での説明の便宜上、これらの文章を箇条書きにして、順次にあげてみよう。

- ①「しかし、諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間的労働であり、同じ人間的労働力の支出である」。
- ②「商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っているのであるが、ここでは一つの同じ人間的労働力として妥当する」。

③「これらの個別的労働力のおおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがってまた一商品の生産においてただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間の労働力である」。

④「社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的な平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である。」(以上、①から④まですべて、前出、四三ページ、傍点はインステイトウト版のもの)。

この四つの文章は、マルクスの「価値法則」についての説明のなかでもっとも中心的な精髓部分をなすものであって、しかもこれら四つの文章は、①からはじまって④にいたるまでみごとな論理的展開をとげているのである。ここには、マルクスの強調する弁証法的思考がこのうえもなく明確に示されているといつてよい。このみごとな論理的展開の内容をただしく把握するには、まず「価値の実体」を成す「人間的労働」と「人間的労働力」との関連を明確にとらえておく必要がある、さらに力という概念の内容をただしく理解していなければならない。つぎに、これら四つの文章の意味を関連づけて簡単に説明してみよう。

まず①において、「価値の実体」を成す「労働」は、商品価値が同じ質のものであるがゆえに、当然、同じ質の「労働」でなければならないこと、「労働」とは「労働力の支出・流動」にほかならないから、その「労働」はまた、「労働力」についてみれば、当然に、同じ質の「人間的労働力の支出」でなければならないことが、はつきりうちたてられる。ところが、さきにみたように、社会を構成する各成員個人の担っている人間的労働力は、現実には千差万別で、けっして同じものではありえない。そこで②の文章が必然的に導きだされる。それぞれちがった無数の個別的労働力

ではあるが、しかし、それらの個別的労働力は、社会を支えるものとして社会的にみとめられるものにならなければならず、社会的に労働力としてみとめられるということは、それが現実に流動させられ、その支出「流動、すなわち人間の労働として、生産物」商品に対象化して、その価値とならなければならない、ということである。あるいは、「商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力」という文句に重点を置いて説明するならば、つぎのようになっているとできる。それぞれがった無数の個別的労働力が全部あつまって社会を支える総労働力を構成しており、この総労働力が流動させられて社会の存続を支える総生産物「総商品を生みだしている」のであって、これらの総労働力は全商品の価値を生みだすかぎりで、社会的な労働力として認められるし、また全商品の価値を生みだすことで社会の存続を支えなければならない、と。無数の個別的労働力は、千差万別でありながら、しかもそれらがすべて同じ質の商品価値を形成するものとしてはじめて人間の労働力として認められるものであるから、それらはこの同じ質の人間の労働力として社会的に妥当するものとなっているのであり、またそういうものとして妥当しなければ、同じ質の商品価値を形成することはできない。では、それぞれにちがった、千差万別の質の個別的な人間の労働力が、どうして同じ質の人間の労働力として社会的に妥当するものとなるのか？ それに答えるのが、まさしく③の文章である。

右の③には、つぎの三つの事柄が順次に示されている。第一は、「社会的平均労働力」という性格 (character) をもつ (besitzt) こと、第二は、「社会的平均労働力として作用する (wirken) 」こと、そして第三は、「一商品の生産においてただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とする」こと、である。これら三つの事柄の展開をただしくとらえるには、さきに指摘したように、力の概念を理解しておかなければならない。力そのものは、たんに潜勢的に存在するものであって、それが現実に力として実現されなければおよそなんらの意味をもちえない。力、

が力として妥当するには、力が力として社会的に認められるには、それが現実に力として発現されるかぎりにおいてである。ここに力、そのものと力の発現との重要な関連があるのであって、このような力の意義は、人間の労働力についてもまさしくあてはまる。各個人がその身体のうちにもっている労働力は、その発現を通じて、つまり労働力の流動・支出、いいかえれば労働、そのものにおいて、はじめて社会的に労働力として認められるものになる。それゆえ、各個別的労働力、そのものはどんなにちがったものであろうと、社会的には問題にならない。これらのちがった個別的労働力が、その力の発現において同じものとして、現実にはたらけば、社会的には、それらの個別的労働力は、同じ労働力として現実に妥当するものとなるのである。こうした力とその力の発現との関連を順次に説明しているのが、右の三つの事柄なのである。マルクスは、個別的労働力が、その力の発現において現実に「社会的平均労働力」という性格をもつものであれば、その個別的労働力そのものは、同じ労働力として社会的にみとめられるのであると述べ、ついで、「社会的平均労働力という性格をもつ」ということは、その力の発現において「社会的平均労働力として作用する」ものだということであり、後者はまた、「同じ商品を生産するのに平均的に必要な労働時間、または社会的に必要な労働時間を必要とする」ものである、と説明する。同じ商品をつくるのに、社会的に必要とされる労働時間だけでこれを生産するならば、まさにその人間の労働力は、その発現において、同じ労働力という性格をもち、同じ社会的平均労働力として作用したのであり、たとえ労働力そのものはどんなにちがっていようと、社会的には同じ労働力として通用するのであり、またそういうものとして通用するかぎり、現実に人間の労働力としてみとめられるのであり、かつ認められるものでなければならぬ。

ところで、「平均的に必要な労働時間」とか「社会的に必要な労働時間」ということは、「社会的平均労働力として

作用する」ということの内容を言いかえただけで、まだ人間的労働の質およびその量・労働時間についてたちいった規定をあたえるものではない。そして、それは、よりたちいった規定をあたえられなければ、最後まで「平均的に必要な」とか、「社会的に必要な」とかいう、具体的内容をもたない抽象的な規定に終始することになり、現実商品生産の必然的發展・変化を規定するものとしての価値法則の意義は、まったく見失われることになってしまふ。このように、ここで決定的な意義をもつところの、より、たちいった規定をあたえているのが、最後の④の文章である。

この④の文章の内容を十分たたく把握するには、なによりまず、マルクスがはじめて解明した「労働の二面性」の理解にもとづいて「価値の実体」である抽象的・人間的労働とその対象化としての商品価値とを的確にとらえること、いいかえれば、マルクスがうちたてた価値概念の基本を正確にとらえていることが不可欠の要件となつてゐるのであり、さらに、生産の主体としての人間の活動・労働とこれにたいする生産諸条件との関連をその全体的な関連のなかでじゅうぶん正しく把握していることがぜひとも必要である。これらのことについては、すでにこれまでの論究によつてあらましのことが説明されてきたと考えられるので、つぎに簡単にその内容の要点を摘記することになよう。

まず、ここには、「生産諸条件」と「労働の熟練および強度」の二つが並べて示されているが、これら二つのものもつ意味は、決定的にちがつている。「人間的労働力の支出」つまり「人間的労働」の質的規定を示すところの後者、すなわち「労働の熟練および強度」がここではもっとも中心的地位を占めているのであって、前者は、要するに「条件」を示すにすぎない（といつても、「条件」にすぎないから重要な意味をもたない、ということではけつてない）。では、労働の「熟練」と「強度」についてはどうか？　といえ、人間的労働力の支出・流動そのものの質

の規定としては、第一に「強度」があげられなければならない。それは、その力の流動がどのような密度でおこなわれるかということ、つまり、支出＝流動における人間主体の負担の度合を示すものであるからである。単位時間内にどれだけの濃さで労働力を支出＝流動させるか——これが質的規定の第一である。これは人間の労働力そのものの支出における密度を示したものであるが、しかし、人間の労働力の支出＝流動そのものは、けっして「価値」ではない。それは「価値を形成する実体」にすぎず、それが生産物＝商品に対象化したときにはじめて商品価値となる。

「労働の対象化」において当然問題になるのは、それが対象化する生産物＝商品の量である。というのは、問題の商品価値はあくまでも単位商品の価値であって、そこに生産された生産物＝商品全部についての単位商品の価値であり、その価値の大きさであるからである。それゆえ、人間の労働力を同じ強度、同じ密度で、しかも同じ労働時間だけ支出＝流動させたとしても、生産物量がちがえば、単位生産物＝商品に対象化する労働量はちがいが、したがって商品価値はちがうことになる。同じ強度、同じ分量の労働力の支出＝流動でありながら、生産物量のちがいを生みだすのが、労働の熟練におけるちがいである。労働の強度は、人間の労働力の支出そのものの密度に関連しているもので、支出の具体的形態とはまったく関連はないが、しかし労働の熟練とは、労働のいわば「効率」を意味し、同じ具体的形態の支出をいかに無駄なく、有効・適切におこなうかということであらわす。それゆえ、労働の強度は、人間の労働力そのものの密度を示し、労働の熟練は、支出の具体的形態における作用度を示すものといわれるのであるが、しかし、いうまでもなく、労働の熟練も、同じく人間の労働力の支出、すなわち抽象的・人間の労働の質的規定であらわすものであることにはかわりなく、それはけっして、具体的労働の質的規定ではありえないのである。

では、人間の労働力の支出、すなわち人間の労働の質——労働の熟練と強度——が同じ社会的平均度のものであれ

ば、同じ質の、等しい量の社会的平均労働は、等しい大きさの価値を生み出すか？　といえ、まだ問題がある。人間的労働はなるほど商品価値を生み出すが、しかしさきに本章の(5)の「労働の対象化」の項で詳細に論究したように、人間的労働は生産物・商品に対象化してはじめて商品価値と成る。しかも、商品価値という場合は、かならず一商品の価値、または単位商品の価値でなければならない。さきに「労働の熟練」の場合にみたように、ここでは、どれだけの量の生産物・商品に対象化するかが決定的な意義をもつのであり、しかも、この、同じ質、同じ社会的平均度の「熟練および強度」の等量の労働が、同じ質と量の人間の主体的活動が、主体の活動そのもの以外の、いわば外部的な要因によって、その対象化する生産物・商品の量を異にするのであって、これらの外部的な要因もまた、この対象化を外部的に規定するものとして、看過することのできない条件を成しているのである。同じ質と量の人間の労働の対象化を規定する外部的な生産諸条件は、生産の客体的要因である生産手段、とりわけ労働手段からはじまって、作業方法から天候、地理的条件にいたるまで、およそ生産・形態変化にかかわりあるいっさいのものをふくんでいる。労働の熟練および強度の社会的平均度という同じ質の人間の労働が等量に支出されて、それが社会的平均労働力の支出として現実・社会的に認められるには、それが社会的に平均的な生産物量・商品量に対象化しなければならず、そのためには、この生産物量・商品量を外部的に規定する生産諸条件が社会的に正常なもの、または平均的・標準的なものであることが、必要不可欠となるのである。⁽³⁰⁾

(30) マルクスは、右のような「社会的に必要な労働時間」についての定式化をかかげたあと、すぐこれについて、「たとえば、イギリスで蒸気織機が採用されてからは、一定量の糸を織物にするためにはおそらく以前の半分の労働で足りたであろう。イギリスの手織工はこの転化に実際は相変わらず同じ労働時間を必要としたのであるが、かれの個別的労働時間の生産物

は、いまだではもはや半分の社会的労働時間をあらわすにすぎなくなり、したがって、それ以前の価値の半分に低落したのである。」(前出、四三ページ、傍点はインスティトゥット版のもの)と述べているが、この説明がどういうことを明らかにしようとしたものであるかということはおろか、この文章の意味をただしくとらえることもできない論者は、枚挙にいとまないほどである。これは、この文章に先きだっておかれた前段の理論的展開の意味を論理的にただしくとらえることをこころがけないためである。前段の意味を十分に理解しているならば、ここの意味は簡単・明瞭である。くりかえしているならば、個別的労働力は社会的平均労働力として作用するかぎりで、単位商品の生産に社会的必要労働時間を要するものとしてのみ、商品価値を形成し、その社会的必要労働時間が商品価値の大きさを規定するものとなる。ところで、社会的必要労働時間を規定する二つの要因、すなわち、人間の労働力の支出・流動そのものの社会的・平均的な質——労働の熟練と強度——と、この支出・流動の対象化を外部的に規定する生産諸条件についてみると、人間の労働の質そのものについてそれが社会的・平均的なものでなければならぬことは、およそ「労働価値」説の立場をとるかぎり、誰にでもたやすくわかる。さきに本稿注(29)で引用したA・スミスの言明もこのことを示している。だが、さきのスミスの説明でも明らかなように、価値を労働に直結して、その労働が社会的・標準的なものでなければならぬことを主張する論者は、マルクスを除いてことごとく、労働そのものをもって価値と考えていたのである。この考え方においては、私的所有にもとづく私的労働の規定は脱落しており、「価値の実体」と「価値」との区別と関連、人間の労働の対象化・物化による人間支配という肝腎の法則、等々は、すべて消え失せてしまっている。だが、マルクスの発見・確立した価値法則は、まさに、これらの諸規定と法則とをその要めとしているものであり、またこの点にこそ、マルクスの価値概念の精髓が存するのである。それゆえ、右の二つの要因のうち、人間の労働の対象化を外部的に規定する生産諸条件の決定的意義のほうをとくに強調し、「労働の対象化」の意義を十分明確に把握させる意図をもって、マルクスは、右のイギリス綿業の例を示したのである。マルクスの「イギリスの手織工はこの転化に實際は相変わず同じ労働時間を必要としたのである」という言葉が疑いもなく示しているように、綿業労働者(蒸気織機工場ではたらく労働者)も手織工も、その人間の労働力の支出・流動そのもの、つまり人間の労働の「質」と「量」はまったく同じである。どちらの労働者も、同じ度合の、いいかえれば社会的平均度の「労働の熟練および強度」の労働を、同じ労働時間だけ支出する。つまり、両者にとっての人間の労働力の支出という負担は、まったく同じなのである。だが、人間の労働力の支出そのものの「質」と「量」がまったく同じであっても、この支出そのものは、そのままでは、なんらの社会的意義をももたない。

それは、生産物・商品に対象化して商品そのものの価値となることによって始めて社会的労働としてみとめられる。だが、価値は、いうまでもなく、単位生産物・単位商品の価値であり、したがって、対象化する生産物・商品の量によって単位商品にふくまれる必要労働時間はことなるのであって、社会的必要労働時間を規定するものとして、外部的な生産諸条件がここに問題となってくる。マルクスの例が示しているのは、この社会的必要労働時間を、労働主体の関知しないところで、同じ賃、同じ量の人間的労働力の支出・流動にもかかわらず、変化させるところの、社会的に正常な生産諸条件の推移であって、このように、労働主体の個人的労働はまったく同一でありながら、社会的に正常な労働手段がいつのまにか手織機から蒸気織機にかわったという事で、かれの労働力の支出の社会的意義は半減し、したがってかれ自身の労働はこれまでの半分の社会的評価をうけるにとどまり、かくして、かれとかれの家族の維持・再生産は困難になってしまふのである。マルクスは、「社会的必要労働時間」を規定する二つの要因のうち、とくに労働主体の人間的労働力の支出そのものにかかわりのない、外部的な生産諸条件の社会的変化のもっている決定的意義を明示するためにだけ、右の例をあげたのではない。この例をもって、「抽象的な説明」だとか、「曖昧な例」などと述べている論者も多々いるようであるが、これは、価値法則そのものの意味内容についての完全な没理解を裏書きしているものであるばかりでなく、また価値法則が現実商品生産をつらぬく自然法則としてその必然的發展を歴史的に規定するものであるという、決定的に重大な価値法則の現実的意義をまったく見落したものであり、総じて科学的理論のなんたるかをわきまえない俗物的見地に終始していることを端的に実証しているものといつてよい。価値法則が発展法則として有するこの決定的に重要な意義については、行論においてたちいった論究がおこなわれねばならないが、ここでは、さしあたり、右のような俗物的見地にたつて、而非マルクス経済学者の参考に供するために、マルクスの右の「蒸気織機」採用の場合の例が、つぎのような重大な世界史的事実をただししく映しだしたものであって、けつしてたんなる論理的説明ではないのだ、ということを指摘しておくことにしよう。

「機械が一つの生産分野をだんだんにとらえてゆく場合には、機械はそれと競争する労働者層のうちに慢性的な貧困を生みだす。この推移が急速な場合には、機械は大じかけに急性的に作用する。イギリスの木綿手織工の没落は徐々に進行して数十年にわたって長びき一八三五年にやつと終止符をうたれたが、世界史上にこれ以上に恐ろしい光景はない。かれらのうちの多くのものが飢え死にし、多くのものが家族もふくめて一日に二ペンス半でやつと露命をつないだ。これとは反対に、イギリスの木綿機械は東インドには急激に作用し、東インド総督は一八三四—一八三五年につぎのことを確認した、——「困窮は商業史

上にほとんど比類のないものである。木、綿、手織工の骨はインドの野をまっ白にしている」(前出、四四三―四四四ページ、傍点はインスティトゥット版のもの)。

すぐれて現実的な価値法則の貫徹は、世界史のなかに、イギリス本土および東インドの数十万の労働者家族の破滅と飢死をもって、刻みこまれているのである！

これまでの説明によってあきらかなように、社会を構成する各私的生産者の担っている個別的労働力が社会的な平均的労働力として現実に妥当するためには、その支出・流動が生産物・商品に対象化しなければならず、そのうえ、「現存の社会的に正常な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、生産物・商品一単位を生産するに必要な労働時間」と同じだけの労働分量がその一単位あたり生産物・商品に対象化せられるかぎりで、それだけの量の社会的平均的質の労働として社会的に認められる、いいかえれば、それだけの量の商品価値としてはじめて社会的に妥当するものになる。こうした内容をふまえて、はじめ、マルクスは、「ある使用価値の価値の大きさ、を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の分量、または、その使用価値の生産のために社会的に必要な労働時間だけである」(前出、四四ページ、傍点はインスティトゥット版のもの)という、価値法則の基本的命題をうちだしているのである。この基本的命題ひとつを後生大事と守って、マルクスの価値法則の内容は、さきにみたスミスの価値規定の内容をたんに正確に規定しただけのもので、要するにそれらはいずれも、商品の価値・ねうちの大きさの規定という、たんなる量的規定にすぎないとする論者も少なくないようであるが、これは、マルクスが古典派経済学の批判をなしとげ、その上にはじめて科学的経済学をうちたてたということの意義をまったく解しえない浅薄な判断であって、自らのブルジョア的低劣水準をさらけだすものである。右のマルクスの基本的命題は、私的所有という特殊な歴

史的生産關係に基礎をおく歴史的社會において、労働生産物が商品という独自の社会的形態をとり、各私的生産者の労働が商品価値を形成せざるをえないことを的確にとらえ、「労働の二面性」の把握にもとづいてたゞしく「価値の实体」としての抽象的・人間的労働とその「対象化」としての商品価値との區別と関連とを明らかにし、各私的生産者の私的労働は、その「対象化」した形態において、しかも社会的平均労働力という性格をもつものとして發現するが、一定の大きさの商品の価値「物の社会的な力」として、はじめて社会的労働として社会的に妥当するものとなることができるし、また社会的に妥当するものとならなければならないということ⁽³¹⁾を首尾一貫的に究明したうえで、はじめて明確にうちたてられたものである。『資本論』第一章第一節においてまず「価値の实体」を究明することによって真に科学的な価値概念をうちたてたマルクスが、これにひきつづいてたゞちに「価値量の規定」を論じて右のような豊富な内容をもつ価値法則の定式化をうちだしていることを、われわれは、十分正確に理解しえなければ、マルクス理論体系をたゞしく把握することは、とうていおぼつかないのである。

(31) ここに述べられていることは、マルクスが、第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」のなかで述べているきわめて重要な言葉——「商品を生産する労働の独自の社会的性格」——の意味する内容と、ほとんど同じものである。この決定的な言葉は、まさに千鈞の重みをもつものであるが、「商品形態はたんに流通形態にすぎず、生産關係とはなんの関連もない」などという、「学問的」たわごとをふりまいているようないかさま師には「永久に通じない言葉」となっているのである。

また、ここに述べられていることのうちで、とくに、私的労働は社会的平均労働力にいわば「還元」され、そういうものとして發現するが、その対象化形態において商品価値を形成しなければならず、これによってはじめて社会的労働として社会的に妥当するものとならなければならないというくだりを的確につかみ、その内容の深さと広がりとを十分に理解していなければ、マルクスが「価値法則は、その國際的な適用において、修正される」と述べていることの意味は、とうていとらえることはできない。ところが、わが国でこのマルクスのいわゆる「國際価値論」をとりあげて論じている「学者」の大部分は、

「価値と価格との一致」または「等価交換」ということが「価値法則」の意味だと勘ちがいて、右の「修正」ということを、「価値と価格との不一致」または「不等価交換」のことだと主張している。「価値法則」という文字の中には「価格」とか「交換価値」とかいう文字はひとつかけらもなくまわっていないこと、「不等価交換」はまさに「等価交換」の否定であって、「修正」という文字とは全然関係がないということ、——こうした初歩的・国語的理解力がすっかり欠けている頭脳にとつては、マルクスの「価値法則」の豊富な内容を感じとれることも、「修正」という言葉の本当の意味を考えることもむずかしいのであって、これは、まさにマルクスの言うとおり、理の当然といってよい。だが、このいわゆる「国際価値論」なるものの吟味は後段でとりあげることしよう。

以上述べたところは、「価値法則」のもっている豊富な内容のうち、もっとも基本的な、中心的なものだけを取りだして、その意義を正確にとらえるということをしただけのものである。「価値法則」は、右のほかに、同じように決定的に重要な意味をもつ側面をもっているものであって、これらのものをただしく関連させて、全体的にその内容を把握することが、大切であり、また不可欠でもある。とくにそれらのうちで、「発展法則」として現実に「価値法則」が歴史的発展を規定している側面は、右の基本的な内容との関連において、十分ただしくとらえられなければならない。しかし、この側面についての論究は、後段の「(9) 発展法則」の項にゆずることにして、ここでは、右に述べた基本的な内容をより明確にする便宜を考えて、「価値法則」についての典型的な謬論をとりあげて、若干の吟味をこのころみておくことにしよう。つぎの(二)ではこれらの謬論とあわせて、関連するマルクスの叙述の検討にあてられるが、つづく(三)では、「国際価値論」とこれに関連する諸問題についての検討もおこなわれるはずである。⁽³²⁾

(32) 敗戦直後のしばらくの期間を通じて、わたしの経済学研究においてもっとも強い関心の的であったテーマの一つは、ほかならぬ価値法則の論究であった。わたしのばあい、マルクスの経済理論の漸次的な理解も、この価値法則のたちいった論究

が、決定的に重要な契機となり、また出発点ともなったものであるということができるのである。読者の御参考までに、はなはだ未熟なものであるが当時発表した拙論のうち、価値法則の論究を中心としたものをつきにあげておこう。

(1) 論文『社会主義経済学と価値法則』（季刊『理論』第九号所載、昭和二十四年七月）。

(2) 論文『いわゆる「価値法則」について』（紀元社『経済学研究』第三集所載、昭和二十四年十一月）。

(3) 論文『経済法則について——価値法則論を中心として』（本誌第四卷第一号所載、昭和二十五年十一月）。

(4) 論文『等価交換論——価値法則論を中心として』（本誌第四卷第二号所載、昭和二十六年三月）。

(5) 論文『いわゆる「労働配分決定の法則」について——価値法則論を中心として』（本誌第五卷第一号所載、昭和二十六年七月）。

(6) 論文『交換価値と価値——価値法則論を中心として』（本誌第五卷第二号所載、昭和二十七年二月）。

(一九七五・二・一三)